

三島由紀夫・森田必勝両
烈士顕彰祭 追悼記念講演
「三島・森田精神を現代に
生かすこととは」

荒谷卓先生

三島由紀夫、森田必勝両
烈士の義挙から四十八年：
残念ながら事態は何も変わ
らない。日本がグローバル
資本主義の元にある限り、
この現実が変わらないので
あろうか？

世界中で反グローバル運
動が盛んとなっている今、
ポスト・グローバル思想の
先駆けとなるのは、日本が
古代から育んでいた精神文
化にあるかもしれない。だ
が、肝心の日本人がそれに
気が付かない。

反グローバル主義の観点
から日本文化を見直すべき
だ。本年度顕彰祭、追悼記
念講演には、陸上自衛隊特
殊作戦群初代群長、荒谷卓
氏を招き、講演して頂いた。

「永遠にアメリカの傭兵
として終わるだろう」

ご紹介頂きました荒谷で
ございます。私は自衛隊に
三十年、明治神宮に十年勤
めていましたが、今は三重
県熊野に移り住み、「むすび

の里」を開設しました。

最近、外来種生物が、
自然環境を破壊していると
して問題視されていますが、
いちばん問題が多い外来種
生物は、外来思想に憑依さ
れた日本人です。三島由紀
夫は、このような外来保守
と外来左翼を厳しく批判し、
「文化防衛」を主張しまし
た。

私が所属していた陸上自
衛隊の前身組織は、昭和二
十五年にCAS（連合国軍
総司令部民事局）の別室（C
ASA、Civil Affairs
Section Annex）の管理下
にあった警察予備隊です。
人事、物品調達、いずれに
おいてもCASAの承認な
しには何もできませんでし
た。

彼らがつとも干渉した
のは教育訓練であり、旧日
本軍の伝統的要素が入らな
いよう厳しくチェックされ
ました。

典型的なのは直接米軍が
指導した空挺教育隊、防衛
大学校等でした。「君らは正
当な民主主義国の軍人であ
り、間違った天皇の軍隊で
はない」との思想を叩き込
まれたのです。

さらに昔未だ、航空自衛
隊は米政府の統合作戦本部

が作成した「日本の防衛に
関する計画構想」から誕生
していますし、海上自衛隊
はマッカーサーの統治と憲
法制定を「無血革命」とし
て絶賛した野村吉三郎（海
軍軍人、開戦当時の駐米大
使）が米極東海軍司令部と
共に作った、海上警備隊が
前身となっています。

自衛隊は創設当初から米
軍の一部として管理運用さ
れていたのです。これでは
「皇軍」と言う以前に、「米
軍の下請け」と言わざるを
得ません。自衛隊を運営、
管理する人間は必然、この
方針に従う事で地位を得て
います。

市ヶ谷台での三島、森田
両烈士の義挙の際、高級幹
部や指揮幕僚過程の幹部自
衛官は彼らにヤジを飛ばし
ました。一方で下士官、兵
卒に当たる自衛官達は「黙
って話を聞け！お前らがう
るさいんだ！」と、高級自
衛官達に反発し、逆にヤジ
を飛ばしていたのです。

同じ自衛官でも二種類に
分けられます。米軍指導下
の元、民主主義の軍隊であ
る事を守ろうとする高級幹
部と、純粹に我が国を守る
うとする下士官や兵卒。マ
スコミによって報じられる

自衛官の意見とは、前者ばかりで占められます。

しかし下士官、兵卒にも意見があり、高級幹部の声とは真逆の事を主張している事もあります。残念ながら彼らの声はマスコミには取り上げられる事はないのですが、高級自衛官OBの方は政府お抱えのコメンテーターとして登場する事が多いです。

自衛隊内部では言論管理も厳しく、下士官、兵卒が自由に意見を発する事は極度に管理されています。万が一政府方針と違う意見が出てくると、懲戒処分となってしまう：これが自衛隊の現状です。

自衛隊の現状は、まさに三島が危惧した「アメリカの傭兵」そのものです。自衛隊と米軍の一体化は、先の平和安全法制(安保法制)でほぼ確立され、憲法改正によって自衛隊は「護憲の軍隊として」憲法の「お墨付き」を得る事になります。

自衛隊の内部では、下士官や兵卒から不満の声も存在していると思います。しかし、こういった声は国民に届かないのです。非常に嘆かわしい状況です。

しかしこの様な体制は長

続きしないでしよう。長い日本の歴史に立てば、戦後憲法下のふしだらな時代に違憲の存在であったことが再評価される時期が来るでしょう。

「反グローバル化宣言」
―世界潮流に逆行する日本

三島は昭和四十四年二月、『論争ジャーナル』に掲載された「反革命宣言」にて、我が国の伝統、歴史、文化を「守るべきもの」として定義しています。

「我々はあらゆる革命に反対するものではない」：と、三島は共産主義者が唱える暴力革命を否定してはいませんでした。日本共産党を含める共産主義勢力が日本の伝統、歴史、文化を否定し、強力的に転覆する事を公然と宣言していることに対抗する為、三島は「反革命宣言」を打ち立てたのです。しかし、現実的には公然と宣言されていなくても、着実に日本の伝統、歴史、文化の転覆は進んでいます。

明治以降から我が国に流入している西欧合理主義、近年はグローバル資本主義が日本の伝統、歴史、文化

を狡猾に、着実に破壊しつつあるのです。

グローバル資本主義は世界にグローバル・スタンダードを打ち立てる事を目標にしていますが、それは元より世界各地にあったローカル・スタンダードを否定した上に成り立つものです。

ローカル・スタンダードとはその地域の伝統、歴史、文化です。これに代わらんとするグローバル資本主義の拡張は共産主義の世界革命と等しいものと言わざるを得ません。

現在の世界潮流を見れば、グローバル資本主義の動きは停滞しています。世界のグローバル化を推し進めていた欧米諸国では特に顕著です。米国のトランプ政権、英国のEU離脱、フランス及び西欧諸国の右派民族政党の勢力拡大と、これまでのグローバル資本主義を見直す傾向にあり、ポスト・グローバル化へ繋がる運動が各国で起きています。

グローバル資本主義に代わる思想とは何か。まだ現段階では明確に姿を現していませんが、今、確実に世界史の大転換期に差し掛かっているのです。

残念ながら我が国では世

界の潮流とは逆行しており、グローバル資本主義化が加速を付けて進行しています。日本の政体はグローバル資本主義を唯一の思想として、世界各国と協調する事もなく、新たな思想を見出す事もなく、盲目的に過行く秩序を指標にして突き進んでいるように見えます。

歴史を遡れば明治期、既に欧米の植民地主義は末期を迎えていました。しかしその当時に欧米の体制を模倣として富国強兵を実施していたのが我が国の政体でした。

結果として我が国は大東亜戦争で敗北し、「植民地主義の大罪」と言う汚名を全て被る事になりました。アジア、アフリカを植民地支配した欧米諸国が批判されない中、日本だけが戦後ずっと汚名を被らされている。このような悲劇が再び「グローバル資本主義を最後まで追い続けた日本」として歴史の汚名を被る事が危惧されます。

世界が脱グローバル化に進んでいる中、日本だけがグローバル化を付き進めてしまう。何故世界と逆行する政策を推し進めるのか。その様な政体を国民は何故

支持するのか。世界的に見てもあまり褒められた事ではありません。

神々と共にある日本人―
「君民一体」

この日本の伝統、歴史、文化：三島は端的に「天皇」と位置付けています。

今上天皇が御譲位の決断をなされ、来年、御代替わりとなりますが、歴史上のケースを振り返っても、陛下が御譲位の決断をされたのは相当重なお考えがあったと思われまます。

私は今上陛下が「日本の民が幸せになるのならば、これで良い」との決断であったならば、その大御心に従いたいと思います。

ただ、譲位された今上陛下が、仮に国体のありようと現政体の違いについて一言でもお話になった時、我々は国体と政体、どちらを選択するかという重大な決断に迫られます。私は迷いなく天皇の大御心に副い奉る覚悟です。

天皇陛下は、八百万の神々を祀るお立場です。八百万の神々を祀るといふ事は、天之御中主神(あめのみなかぬし)から連綿と続く

神々を全て祀るお立場になります。

日本の国体とは、それらの神々を祀る天皇陛下と神々の子孫たる国民の一体化から成立するものです。即ち「君民一体」です。

古事記においては、天之御中主神と高御産巢日神(たかみむすび)、神産巢日神(かみむすび)の造化三神が天地開闢の時に高天原に自ら成りまして、次から次へと万物万象の生成活動を開始します。

その生成活動が連綿と続く中に我々は生まれ生きて神々の活動を継承しているのです。この根本的な宇宙観、自然観、社会観こそが、日本の文化、伝統の骨幹であるといえます。

我々の神々は、自らが森羅万象となつて生まれたものです。そして、われわれはその子孫であり、我々の中に神々が内在するのです。「万物一体」：これが日本文化の思想の根本的な原理であり、特徴とも言えます。

しろしめす(全ての人々の心をお知りになつている)、きこしめす(全ての人々の祈りをお聞きになつている)、みそなわす(全

ての民の様を御覧になつて
いる」との言葉がある様に、
日本の神々は民と共にあり
ます。

この神々の受容に対し、
「神々が側に居てくれて有
難い」と、感謝する思いを
持ち得るのが日本の民の素
晴しいところなのです。国
民に神々に感謝する心がな
ければ、日本の文化は成立
しないでしょう。

日本の文化では神々に対
する感謝の念を持つ事を体
の中に染み込ませていまし
た。二月十七日に行われる
祈年祭は、「今年も五穀豊穰
であります様に」と神に祈
るお祭りです。では五穀豊
穰がもたらされればそれで
済むのでしょうか？

祈りとは「意」を「宣る」
ことで、神に意思を誓うこ
とで、それを法にするとい
う意味があります。皆で挙
げた「祈り」は「のりと」
であり、国民皆で誓約を交
わした、との意味がありま
す。神々の五穀豊穰を祈る
事は、皆の努力を以て五穀
豊穰にしなければならな
い、と、神々に向けて約束する
事なのです。

そうして五穀豊穰がもた
らされても、「俺が自分でや
ったんだ」と増長する事な

く、「神々のご加護のおかげ」
と感謝しなければなりません。
それが十一月二十三日
に行われる新嘗祭（いな
めさい）です。新嘗祭では
天皇陛下が五穀を神々に勧
め、自らもお食べになり、
その年の収穫に感謝します。
国民に日本文化の模範をお
示しになっていらつしやる
のです。

「和の精神」と文化を防
衛する「武人」

日本の皇室は天津神（あ
まつかみ 高天原から天下
つた神々）の子孫とされま
すが、皇尊（すめらみこと
天皇）が日本を統治する以
前、大國主命ら国津神（く
につかみ 天孫降臨以前か
ら日本を治めていた土着の
神々）の時代があったから
こそ、成り立った文化だと
言われています。日本各地
の在所共同体に共生共助と
感謝の文化が生まれ日本文
化の下地ができていたので
す。しかし、在所共同体間
では対立が続き、しばしば
戦がおこりました。これを
見かねた天照大神が、葦原
の瑞穂の国に建御雷神（た
けみかずち）を使わします。
そして、すべての在所共同

体の祈りを皇御孫命が「し
ろしめし、大倭日高見国を
安国と平らけく和する」と
仲裁した事で、すべての国
民が共生共助氏和して育む
日本の文化が成立した：と
私は推測します。

国津神つまり縄文時代に
形成されたこの文化は、天
津神の降臨：弥生時代に受
け継がれ、長い時間を経て
我々の血肉となり、日本固
有の報恩感謝の文化として
昇華して行つたのでしょう。
その要である皇尊、歴代天
皇は今上陛下に至るまで、
ただひたすらに天照大神か
ら命ぜられたお役を果たし
ているのです。

天皇陛下は命令も指示も
強制もされません。ただ「し
ろしめす」という御存在に
対し、国民側も、それをあ
りがたいと感謝し、何か「恩」
を返さなくてはと思うとこ
ろに、忠孝の崇高な精神が
生まれ、これが日本民族の
守るべき伝統・文化である
と思います。

これが「和を尊ぶ」精神
ですが、「和」だけでは社会
は成立しません。「和を乱す」
者、部落の結束を乱し、祈
りを妨げる者は、祓いをし
て懲らしめるのです。「和を
乱す者」は人間の体におけ

る病原菌の様なものであり、病原菌が入ると体内の免疫細胞がこれを駆除します。

「和の精神」を守る免疫細胞の役を担っていたのは「武人」でした。「和」と「武」はバランスを保っており、どちらか一方に偏っても社会に良い影響を与える事はありません。

和を尊ぶ皇室と、国民が一体化する生きた文化を「守りたい！」とする、猛き思いを持った少数の人間が自らの生命を賭したのが日本の武人だと思えます。武が否定された現代日本において、いかに武の精神を表わすか。これが大きなテーマになって来ます。

現代自衛隊は武士なのか、それとも騎士なのか？

しかし、果たして現代の日本人に、三島、森田両烈士と同じ事をし得る者が出て来るでしょうか？私が熊野に移住を決めたのは、「その様な者は当面出て来ない」との結論に至った為であります。

現代日本人には、自らの中の文化を守ろうとする気概を持った者は出て来ません。本当の日本文化を自ら

の内に育まない限り、その力が出てこないのです。

理屈、知識の上では日本文化の素晴らしさを理解しているかもしれない。しかしそう思っている、合理主義と競争原理に生きなければならぬ現代人には、日本の文化を自らの内に育む余裕がないのです。

知らず知らずの内に、異国からもたらされた「ルール」の中でもがく状況となっている。ある者はストレスに苦しみ、ある者は日本文化を捨てて外来思想に身を任せ、保守と言われている者も米国の傀儡政治家を御輿に乗せて日本文化を破壊し続けているのです。

現代は情報化社会であり、昔に比べれば情報はいくらでも入手できます。しかし、入ってくる情報が多すぎて整理できない。その情報を得たところで、自分の生活に必要なものとそうでないものと比べた時、どうしても合理的で競争に勝つための手段を選んでしまいます。こういった状態では、頭では理解できても心の中までは日本文化は染み込めません。「命を賭して守りたい！」と湧き出てくるものが出て来ないのです。

私は自衛隊に居た頃より、それをつくづく感じていました。冒頭に申したように自衛隊は米国が作り上げた軍隊であり、その文化も米国の文化です。入隊しますと自衛官は服務の宣誓を行います。これは西欧キリスト教文化、騎士道の習慣から来ています。

西欧の騎士は、文字も読めず、教育も受けないまま、子供のころからただ人を殺す事をトレーニングされま。そのような殺傷しか知らない騎士が、教会で読み上げる道徳、倫理規範を復唱する事で宣誓したと認められ、「騎士」となるのです。彼らにとってはカトリック教会が教える道徳、倫理観が絶対な価値観とされ、教会の敵である異教徒、異端者を徹底的に殲滅させるのが騎士の役目となりました。それは十字軍遠征や大航海時代以降の西欧列強の植民地支配にも受け継がれてきた思想です。

しかし、教会は革命で失墜し、国王も貴族も倒された事で、欧米社会から騎士道は絶滅します。

日本の武士道とは、西欧の様子上から与えられるものでなく、自らが修養して

築き上げるものです。山岡鉄舟は一五歳で自ら「修身二十即」を定めました。「独行道」を記した宮本武蔵、なによりも大楠公（楠木正成）の「壁書」等がそれを物語っています。

明治以降、日本では武士階級は消滅しますが、武士道は滅びずに現在まで受け継がれています。「自分を律する事」が即ち武士道であり、階級や雇用者に依存している訳ではないのです。

日本で生まれるか？ポスト・グローバル化の思想

自発的な倫理、道徳観を育む事も日本文化の一環ですが、現代自衛隊で行われる服務の宣誓では、こうした自律性はありません。昨日まで考えた事もない自衛官の宣誓を復唱すれば、「直に自衛官」になります。とても、日本古来の武の文化が自衛隊に継承されているとは言えません。

後はひたすら、上から命じられるがままに訓練、教育を受ける。まるで古代ローマ時代の奴隷の剣闘士です。自らの思想なくして、組織が与えられた外来思想に忠実な戦闘マシンとな

る…これでは我が国を守るという本質的な気概は見えて来ません。

私が移住した熊野は日本古来の文化が生きている地です。この地で本当にお金を介さずに生き、生きる為に必然としてやらねばならない仕事に従事したいと思えます。そうなれば、働く事の喜びは言わずもがな覚えるでしょう。

これを日々体験する事で、私はやっと、日本人が日本人たる思想を自らの中に養う事ができると思います。その時こそ、日本の文化防衛の根本にやっと気が付く事ができるでしょう。

日本人が日本人となっていれば、それが軍隊であろうが、軍隊でなかるうが、天皇陛下と心を通じる事ができ、日本の本質を知る事ができると思います。自らの中に文化が溶け込める様に、私は熊野の地で努力をして行きたいと思えます。その地では日本人の他に、やはりポスト・グローバル化時代において、次なる時代のビジョンに思い悩んでいる世界中の人々を招待して、一緒に共同で働きたいと思えます。

震災後の助け合いに見ら

れる様に、日本人は国家の統制がないほうが、一層協力し、発展する能力を持っているました。これは西欧文化には見られない、日本文化の特色です。

私が尊敬する葦津珍彦先生は、日本文化をアナーキズムと比較して、「無政府主義が日本文化に一番近い」と指摘していました。つまり、天皇と国民がいれば、政府は要らないのです。

本当にそんな事ができるかといえば、現下の国際秩序の中では難しいでしょう。でもそれは、日本人が世界の秩序を変えれば可能になります。

いつまでも、誰かが作ったルールの中でしか生きられないプレイヤーとしての存在から脱するべきでしょう。

プレイヤーはルールが変われれば生きる事はできません。ルールを変えるのはルールメイカーです。日本人は自らがルールメイカーにならねばなりません。

それは、日本民族が自立独立することです。そうすれば、世界中の民族が自信を得て自立独立するでしょう。自立独立した民族間に共生共助の国際秩序を創れ

ば、世界に真の平和が訪れるでしょう。

藤祐靖氏、予備役ブルーリボンの会との共著)

講師略歴

荒谷卓（あらかや・たかし）先生

昭和34年秋田県生まれ。東京理科大学卒業後、昭和57年に陸上自衛隊入隊。第19普通科連隊、陸上自衛隊調査学校（現在の情報学校）、空挺団、第39普通科連隊を経て、平成7年、ドイツ連邦軍指揮幕僚大学校に留学。帰国後、陸上幕僚幹部防衛部、防衛局防衛政策課勤務を経て平成14年からは米陸軍特殊部隊群（グリーンベレー）に留学。平成16年、陸上自衛隊特殊作戦群の初代群長に就任。平成20年に退官。翌年に明治神宮至誠館館長に就任。平成30年11月からはポスト・グローバル資本主義のより良い世界を目指し、三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」を設立。

主な著書に『戦う者たちへ日本の大義と武士道』『自分を強くする動じない心』（共に並木書房）、『自衛隊幻想 拉致問題から考える安全保障と憲法改正』（産経新聞出版、荒木和博氏、伊